

平成 24 年度
募 集 要 項

健康科学研究科
[修 士 課 程]

学校法人 東筑紫学園
九州栄養福祉大学大学院

1. 入学受入方針(アドミッション・ポリシー)

○ 健康科学研究科(修士課程)

九州栄養福祉大学は、平成23年度より2学部3学科となり、これに伴い平成24年度から大学院修士課程はこれまでの食物栄養学研究科食物栄養学専攻を健康科学研究科健康栄養学専攻に名称変更することが認可されました。設置当初の「食」を通して福祉を実現するという教育研究目標を深化させるために、リハビリテーション学部の教育内容を取り入れ大学院の教育研究の充実を図ります。人間の健康を食と栄養の観点のみならず、健康生活の維持及び疾病や事故によって身体機能に障害を有するクライアントの生活再建及び社会参加を積極的に支援できるように大幅に拡充した教育研究内容です。食と栄養による健康保持とともに、リハビリテーションを通じての身体機能の維持あるいは回復を図ることができるより高度な大学院教育を行います。

そこで、現在の食物栄養学部に設置されている大学院食物栄養学研究科食物栄養学専攻を、人間の基礎となる「食とリハビリテーション」を連動的に捉える教育研究を行うために、健康科学研究科健康栄養学専攻に名称変更して、健康づくり・障害予防・障害者支援を含めた高度専門能力を有する人材育成を目指します。

本学の建学の精神「筑紫の心」及び上述の教育内容に賛同する学生を受け入れることをアドミッション・ポリシーとしています。

2. 課程名・出願資格・募集定員

課程名	健康科学研究科(健康栄養学専攻) 修士課程
出願資格	下記のいずれかに該当する者で、本研究科が受験を認める者 ①大学を卒業又は平成24年3月卒業見込みの者 ②外国において、原則として学校教育における16年の課程を修了した者 ③文部科学大臣の指定した者 ④上記以外の者で、本学が出願を認めた者
募集定員	4名 (男女共学)

※ ④出願期間前に個別入学審査資格審査を行いますので、「10.入学資格の個別審査について」を参照してください。不明な点がある場合は教務課入試係に問い合わせてください。

3. 入試日程・試験会場・選抜方法等

後 期 入 学 試 験		
出 願 期 間	平成24年3月12日（月）～平成24年3月21日（水）	
選 考 日	平成24年3月23日（金）	
合 格 発 表	平成24年3月27日（火）	
入学手続完了日	平成24年4月 2日（月）	
試 験 会 場	九州栄養福祉大学（北九州市小倉北区下到津5-1-1）	
試 験 科 目	英 語 （辞書持込可）	9：30～10：30
	専 門 科 目 （筆記試験）	10：50～11：50
	面 接	12：40～
選 抜 方 法	上記試験科目、面接、研究計画概要書及び提出書類を総合評価して可否を判定する。	

4. 出 願 手 続

(1) 出願書類

- ① 入学願書(A票・写真貼付)
- ② 副 票(B票・写真貼付)
- ③ 受験票(D票・返信用はがき)
住所・氏名を記入し、指定期金の切手を貼付してください。
- ④ 最終出身学校の成績証明書・卒業見込み証明書(または卒業証明書)
※九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学の卒業生(卒業見込みの者)は不要です。
- ⑤ 略歴書(大学既卒者のみ提出のこと。本学所定。)
- ⑥ 研究計画概要書(本学所定。)
- ⑦ 入学検定料(30,000円。払込受付証明書を、願書C票に貼付してください。)
- ⑧ 宛名ラベルシート(可否通知書及び入学案内等を送付するため、住所・氏名等を記入してください。)

(2) 出願方法

上記の書類を揃え、出願期間内に書留(または持参)により提出してください。持参の場合は、日・祝日を除く月曜日から金曜日までは午前9時より午後4時まで、土曜日は午前9時より正午まで、窓口受付をします。

提出先：「九州栄養福祉大学大学院 教務課入試係」

〒803-8511 福岡県北九州市小倉北区下到津5丁目1-1

5. 受験上の注意

- ① 試験当日は必ず受験票を携帯し、机上に提示すること。
但し、出願締切日直前のため、あるいは遠隔地のため受験票を受験者本人に返送する余裕のない場合は本学教務課で保管しておきますので、受験当日に教務課窓口で受け取ってください。
- ② 20分以上遅刻した場合、原則として受験できません。
- ③ 筆記用具は各自持参してください。なお、上履き(スリッパ等)は必要ありません。
- ④ 昼食は各自持参してください(弁当等)。

6. 合否発表

- ① 合否は本人宛の郵便で通知します。本学での掲示はしていません。
- ② 合否についての電話による問い合わせには応じていません。

7. 入学手続

合格者が入学手続完了日までに、合格通知に同封する文書に従い、入学手続時納入金[入学金、学費(前期分)]を納入することにより、入学手続の完了とします。

なお、期間内に入学手続時納入金を納入しない場合は、入学辞退として取り扱います。

8. 入学検定料・入学金・学費

- (1) 入学検定料 … 30,000円
- (2) 入学金 … 230,000円 (九州栄養福祉大学・九州リハビリテーション大学校・東筑紫短期大学卒業生は入学金を免除します。)
- (3) 学費 (単位:円)

	入学手続時納付額	後期納付額(10月)	年額合計
合計	440,000	440,000	880,000
授業料	340,000	340,000	680,000
施設設備費	50,000	50,000	100,000
実験実習料	50,000	50,000	100,000

- * 委託徴収金は入学後納付していただきます。
- * 実験実習材料代は別途実費が必要となります。
- * 学費(後期分)は10月20日までに納入してください。

* 本表は著しい経済変動があるときは変更することがあります。

9. 学 生 寮(女子学生のみ)

(1) 入寮手続

入寮希望者は入学願書の申込み欄にその旨を記入してください。後日、合格通知と同封で申込み書類を郵送します。なお入寮希望者が多数の場合は入寮できないこともあります。

(2) 寮 費

入 寮 費	(入寮時のみ)	35,000円
寮 費	愛 親 寮・清 心 寮	228,000円
食 費	(月額:日曜日を除く朝・夕2食付)	20,125円~21,735円

* 寮費は年2回の分納です。

* 食費には消費税が含まれています。

10. 寄附金について

* 入学後に1口3万円の寄附金の募集を行なっています。応募は任意です。

11. 入学資格の個別審査について

九州栄養福祉大学大学院では、学校教育法施行規則第70条第6号に定める「大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達したもの」(以下、「個別資格審査対象者」という。)についての申請方法、入学資格審査基準等を次のとおり定めました。個別資格審査対象者は、下記の要領に従って申請を行ってください。

(1) 個別資格審査対象者

大学を卒業していない者(卒業見込み者を除く。)等の学校教育法に定める入学資格を有しない者で、大学を卒業した者と同等以上の学力があると見込まれる者で入学時において22歳に達する者。

(2) 申請期間・申請方法

別紙「九州栄養福祉大学大学院 入学資格審査申請書」(様式1)に添付書類を添えて、それぞれの入学試験の出願期間の開始2週間前までに本学教務課入試係に提出してください。

(添付書類)

- ① 略歴書(本学所定の「略歴書」を使用してください。)

※ 出願が認められた場合には出願書類⑤となりますので、出願時に改めて提出の必要はありません。

- ② 短期大学・専門学校(専門課程)等で修得した単位を証明する書類(最終出身学校の成績証明書・卒業証明書等)

※ 出願が認められた場合には出願書類④となりますので、出願時に改めて提出の必要はありません。

- ③ 大学での教育と同等と思われる科目に相当する社会での実務経験を証明する書類
④ 健康科学研究科を受験するに至った経緯について、これまでの人生における経験と関連づけた志望理由書(様式自由、800字程度)
⑤ 論文・報告書等

(3) 個別資格審査の決定・結果の通知

個別資格審査の結果は、各入学試験の出願期間開始日までに入学資格審査結果通知書により通知します。

(申請にあたっての注意)

添付書類等の不備があった場合は、受付できないことがありますので、書類を提出する前に事前にお問い合わせください。

健康科学研究科〔修士課程〕 教育課程

区分	授業科目	1年		2年		
		前期	後期	前期	後期	
必修科目	健康科学特別講義	2	2			
	健康科学研究法特論講義	2				
	健康科学研究法特論演習		1			
	特別研究Ⅰ	2				
	特別研究Ⅱ			6		
選択科目	健康栄養学領域	臨床栄養学特論Ⅰ	2			
		臨床栄養学特論Ⅱ		2		
		食品学特論Ⅰ	2			
		食品学特論Ⅱ		2		
		栄養生理学特論Ⅰ	2			
		栄養生理学特論Ⅱ		2		
		生化学特論Ⅰ	2			
		生化学特論Ⅱ		2		
		栄養教育特論Ⅰ		2		
		栄養教育特論Ⅱ			2	
		薬理学特論Ⅰ	2			
		薬理学特論Ⅱ		2		
		食品加工学特論Ⅰ		2		
		食品加工学特論Ⅱ			2	
		解剖生理学特論Ⅰ	2			
		解剖生理学特論Ⅱ		2		
		栄養福祉特論			2	
		リハビリテーション学特論Ⅰ	2			
		リハビリテーション学特論Ⅱ		1		
		健康運動機能特論Ⅰ	2			
		健康運動機能特論Ⅱ		1		
		自律神経障害支援特論Ⅰ		2		
		自律神経障害支援特論Ⅱ			1	
地域活動支援特論Ⅰ		2				
地域活動支援特論Ⅱ			1			
環境健康生活特論Ⅰ	2					
環境健康生活特論Ⅱ		1				

〔修了要件〕

1. 最低取得単位数は30単位とする。
2. 修士論文の審査に合格すること。

講義等の内容

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
健康科学特別講義	食・健康・栄養・リハビリテーションに関連する諸科学が目覚ましく進展し、これまで別々に発展してきた関連諸科学を統合し、新たな学問領域を形成しつつある。健康科学特別講義では複数の教授が分担してそれぞれの専門分野の動向を踏まえて、現状と課題について紹介し、注目されている内容について解説するとともに、これまで取り組んできた研究課題を概説することで、それぞれの専門分野における修士論文作成につなげていく。
健康科学研究法特論講義	健康科学分野に寄与できる研究テーマの選択、データ収集、統計処理など研究デザインに関する一連の方法、ならびにプレゼンテーションや修士論文執筆の方法などについて教授する。
健康科学研究法特論演習	「健康生活の番人」として、栄養学研究とリハビリテーション学研究の融合をコンセプトとして掲げていることより、研究結果の考察を進めていく上で各専門基礎分野の学問から導かれた科学的根拠をいかに明確に示していくかについて学習していく。
臨床栄養学特論 I	生体にとって摂取された栄養素がスムーズに代謝されるには、生体の酸・塩基平衡が確実に保たれていることが必須である。酸・塩基平衡は体液の緩衝系・呼吸調節機能、腎臓、などによって調節されているが、ことに小児では、そのバランスが簡単に障害される。ここでは、①体内代謝と酸の産生、②体液の緩衝作用と pH の調節、③体液 pH 調節の原理、④生体の酸・塩基平衡異常、⑤アシドーシス、⑥アルカローシス、⑦食事療法について実例を提示しながら講義を行い、食を中心にその対応を検討する。
臨床栄養学特論 II	近年、アレルギー疾患が急増している。その理由として①住環境の変化、②食環境の変化、③精神環境の変化、④体質の変化、などがあげられている。なかでも最も有力な仮説として、衛生仮説がある。住環境・食環境が以前と比較して極めて衛生的となり、感染症が少なくなったことが指摘されている。すなわち人の免疫の中で感染に対応する Th1 リンパ球が少なくなり、アレルギーを起こしやすい Th2 リンパ球が相対的に増えてきている。食環境を中心にしてこの問題について考え、検討してみたい。
食 品 学 特 論 I	食品は蛋白質や炭水化物などの高分子物質をゲル状で多量に含有し、その硬さ、軟らかさ、口当たり、あし、こしなどの言葉で表現される食感は、食品の二次機能として重要である。これらの食感を検討する物性の研究分野にレオロジー的研究が発展し、食品の美味しさとか食感とかいう心理的感覚的要素をある種の物理量によって示すことが可能となった。レオロジー(rhology)とは物質の変形と流動に関する化学であり、複雑なコロイド系や高分子の粘弾性、異常粘性、塑性流動等が取り扱われている。本講義では、先ずレオロジーの基礎及び測定法について、次に各食品の物性について学習する。
食 品 学 特 論 II	食物は人にとって1日たりとも欠くことはできない。人は経験を積み重ねて、安心して食べることができるものを選択してきた。しかし、現代社会ではつくる人と食べる人が分離されている場合が多くなり、一方、多種多様な加工食品が普及し、市場のシステムに組み入れられると、さまざまな危害に遭遇するリスクが増加し、食物摂取による健康障害のリスクをゼロにすることは不可能である。講義では、この観点から「食の安全性」についてのリスクの発生と制御について論究する。

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
栄養生理学特論 I	<p>(病態生理学)</p> <p>管理栄養士として現場で重要なことは、病気の成り立ち、すなわち、病態生理学を十分に理解することであり、このことなしには更なる能力の発展は期待できない。特に最近の分子生物学的・遺伝子学的な進歩は著しい。本特論 I においてはこれらの見地から、各システム、たとえば消化器における物質の消化吸收・代謝の過程・内分泌系のフィードバック、循環系のダイナミクスなどにつき最近業績をも含む知識につき概説する。</p>
栄養生理学特論 II	<p>(食欲・飲水の脳内調節機構)</p> <p>まず、摂食・飲水を調節する脳内機構の神経回路網と物質的基盤につき詳細にまとめる。次いで、本講義担当者の専門領域である摂食・飲水関連の生理活性物質やペプチドの細胞内情報伝達経路、チャンネル、現れてくる電気的応答、カルシウムイオンの動きを示す蛍光イメージングなど細胞生理学的なものや分子生物学的な免疫染色法によるタンパク質、相補 DNA による遺伝子の動きの追跡などについて講義する。</p>
生 化 学 特 論 I	<p>タンパク質はあらゆる生命現象を司る基本的物質である。生体触媒、生体構造の保持、生体防御物質、情報伝達物質など多様な働きをしている。生化学の発展に伴い、代謝や合成・分解、制御機能などが分子レベルで解明されている。一方、アミノ酸はタンパク質合成の素材としての役割のほか、化学構造や性質の特異性から固有の機能を示すとともに、タンパク質・アミノ酸の特性や機能を高度なレベルで、かつ栄養学的視点も取り入れて講義する。</p>
生 化 学 特 論 II	<p>生化学特論 I に続き、生理活性物質の特性・機能などに関する最近の知識を修得する。具体的には食品や体成分中の特異的な生理活性を示すペプチドを取り上げて、それらの単離・同定、合成、構造・機能相関、応用研究などを最近の英文雑誌を通して抄読する。酵素阻害、酸化抑制、抗菌作用などの生理活性を有するペプチドや関連物質が相次いで見出されると共に、機能性食品あるいは医薬品として実用化へ向けての展開が試みられている。これらについて学習し、英語論文の読解力も養成する。</p>
栄養教育特論 I	<p>栄養疫学を中心に講義を進める。栄養疫学は、地域集団を対象として、疾病とその規定要因、中でも栄養との関連を明らかにする科学である。したがって、食事調査法の基本から結果および評価とその応用に至るまで、それらを連携づけて学習する。たとえば食物摂取の変動要因、食物摂取状況調査の種類、方法、特徴、調査結果の解析および利用方法など。また結果の解析では、栄養統計の基本概念と方法を解説し、活用等について検討を行う。</p>
栄養教育特論 II	<p>栄養教育論のカリキュラム中、行動科学の分野である食行動の解明は重要である。栄養教育の最終目的である栄養状態の改善には、食行動の変容が基本となる。具体的には、基礎として、健康行動理論の基礎、健康信念モデル、自己効力感、ストレスとコーピング、計画的行動理論、社会的支援の問題について解説する。応用では、生活習慣病の予防と治療に視点をおき、健康行動理論と食事療法・運動療法・生活療法の取り組み、健康増進プログラムについて考究する。</p>
薬 理 学 特 論 I	<p>食生活は健康の維持および病気の予防においても重要な役割をもっている。他方、医薬品は病気の治療あるいは予防にはかかせないものである。高齢化社会が急速に進展している現在、健康維持するために予防医学の重要性が指摘されている。従って、食と医薬品の両方を理解し、患者様や顧客にわかりやすく説明できる専門知識をもつ管理栄養士が必要であると思われる。本薬理学特論 I は、生活習慣病(高血圧、糖尿病など)及び中枢性疾患(パーキンソン病など)の薬物療法及びそれらに使用する医薬品の薬理作用、さらに食事と医薬品との相互作用について講義する。</p>

授業科目名	講義等の内容
薬理学特論Ⅱ	<p>食べ物と医薬品の薬理作用とは密接な関係があり、食品中の特定化学成分によっては体内で薬の働きや、効力を変える場合がある。これらの内容については薬理学特論Ⅰで講義している。薬理学特論Ⅱでは、食品中に含まれる特定成分が健康の維持増進に役立つことが証明された化学成分についての科学論文または成書を抄読することによって、その内容について解説及び考察することにより英語論文内容の正確な把握と理解力の習得を目標としている。</p>
食品加工学特論Ⅰ	<p>食環境の多様化や複雑化、あるいは国際化によって食生活は豊かになった。その中で生産・加工・流通・保存・貯蔵の技術は目覚しく進歩してきた。食品加工学特論Ⅰではその進歩する食品の加工及び貯蔵について、その科学的あるいは技術的知識について掘り下げていきたい。具体的には、畜産物(乳・肉・卵)について、それぞれの食品の加工・貯蔵の関わる、基礎的な特性を理解し、加工との関連を考察する。</p>
食品加工学特論Ⅱ	<p>現在、様々な加工食品が食生活を豊かにしている。それらの加工食品の製造技術も目覚しく進歩してきている。食品加工学特論Ⅱでは、多くの加工食品の中から、特に牛乳・乳製品及び各種肉製品に焦点を絞ってそれらの原料の理化学的特性や嗜好的特性について科学論文を抄読し、深く探究するとともに、加工プロセスによる品質変化について深く探求する。具体的には乳及び肉製品に関する最近の国内外の文献を取り上げ、近年の科学的、技術的動向や課題などについて深く理解させる。</p>
解剖生理学特論Ⅰ	<p>ヒトの体の成り立ちを根本から理解するために、ヒトが一種の動物であるという観点から、そのボディープランを比較解剖学的、比較発生学的に学んでいく。脊椎動物の基本体制を学びながら骨格系、神経系、そして内臓がいかにして現在のヒトにおける体制をとるようになったかを考察していく。機能的には神経を中心に学ぶが、脳と脳神経、脊髄と脊髄神経、および自律神経を学ぶ。脳神経はそれぞれ個性的な役割をもつし、脊髄神経は上肢下肢の支配に大きな働きをする。また、末梢神経の再生についても、それがどのような現象なのか、メカニズムについて考察する。</p>
解剖生理学特論Ⅱ	<p>「食べる」行為は口腔に始まり、そのメカニズムを深く理解するためには頭頸部についての医学歯学的な基礎知識が必要である。そもそもヒトの頭部形成には鰓弓が大きく関わるが、鰓弓を理解すると鰓弓に由来する構造物や脳神経も同時に理解することができる。例えば神経では三叉神経、顔面神経、舌咽神経、迷走神経の分布と機能についての理解である。それに加えて頭頸部の自律神経を学べば、咀嚼、嚥下、味覚といった、「食べる」行為のメカニズムに迫っていくことができる。解剖生理学特論Ⅱでは解剖生理学特論Ⅰで学んだ基礎知識の上に「食べる」ことについて解剖学的生理学的な内容を積み上げていく。</p>
栄養福祉特論	<p>未曾有の少子高齢社会において健康で幸福な社会を構築するには、食べ物を基本とした福祉、すなわち食を通して福祉を実現しようとする栄養福祉が有効な方法と考えられる。栄養福祉を実現する重要な実践主体として今日大きな役割を持つのが管理栄養士である。</p> <p>栄養福祉特論では、栄養士活動の歴史を検証し、保健・医療・福祉を取り巻く環境が変動する中で、心の通う健康福祉社会の実現に管理栄養士がどのように係わり、どのような役割を果たすべきかを実践例をもとに考察し、さらに相互討議を重ねて栄養福祉への理解を深化させることによってその内容の高度化を図り、食の専門家としての実践能力を高める。</p>

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
リハビリテーション学特論Ⅰ	<p>リハビリテーションの概念は大きく変化し、今や単に障害に対する治療・訓練というものではなく、いかに高度に進歩した臓器別専門治療を提供し、年老いても障害をもちながらも、住み慣れたところで安心して自分らしく暮らせるように具現化をするところにある。</p> <p>今日のリハビリテーションの最終目標は、安全で質の高い生活の保障であり、理学療法士・作業療法士は健康づくりから疾病予防、そして救急治療から地域生活に至るまで、多職種と共に質の高い医療・介護サービスが提供し、心豊かに安心して暮らしていける地域づくりに寄与しなければならない。ひとは足で歩き、手でさまざまな道具を使い行為を行っている。足と手の機能もその目的遂行のより進化、発達してきた。そしてひとを取り巻く生活環境はその機能に合わせて創り出されてきたとも言える。そのため、何かの原因で本来の機能が障害された場合、さまざまな問題が生じてくる。その問題発生の予防、あるいは解決こそがリハビリテーションの課題となる。こうした観点から「生活支援」という言葉をキーワードとして、地域で人間らしく生きることについて考える。</p>
リハビリテーション学特論Ⅱ	<p>今日、リハビリテーションの対象となる患者は、急性期から維持期(慢性期)まで、あるいは新生児から高齢者まで、あらゆる疾患とあらゆる年齢階層に渡っており、その多くがなんらかの栄養障害を呈している。そこでまず、このような栄養障害がなぜ起こり得るのか、疾患・障害と栄養障害との因果関係をみる。次に、これから離床し、積極的なリハビリテーションを施行される患者に対して、体力や筋力を効率的に改善させ日常生活動作の向上を図るためには、どのような栄養素がどの程度必要であるのか、或いは逆に栄養不足により運動や活動にどのような影響が出てくるのかを調べる。例えば、患者の一日の活動水準の違いによりエネルギー所要量が異なるが、激しい運動を行う場合は糖質と脂質が十分に補充されなければならない。運動すると筋肉は肥大するが、効率よく筋力を付けるためには十分なタンパク質が必要である。また、カルシウムは筋肉の収縮に不可欠であり、不足すると運動中に筋痙攣を起こしたりすることがあるなど、運動中の事故を予防し、効率よく運動を継続するためにもこのような知識を修得することは重要である。疾患固有の栄養障害を知り、栄養障害が運動に及ぼす影響について学習する。</p>
健康運動機能特論Ⅰ	<p>健康を前提とする運動機能には日常生活活動を維持あるいは遂行するための能力である体力が強く関連する。これには防衛的、行動的体力としての身体抵抗力、免疫能や運動などの概念が含まれるが、特に運動に関して必要となるエネルギー源は食物からの栄養補給に依存している。日常生活での健康を維持あるいは増進させるための健康づくりには食事と運動のバランスをいかに適切に保つことができるかが基本的原則となる。臨床では低栄養状態にある対象者や高齢者を対象とする際のリハビリテーションにおいて栄養管理に伴う合併症予防や早期回復を促進するための栄養サポートチームによる介入の重要性が認識されつつある。当然、これら対象者の治療に携わる理学療法士・作業療法士にも栄養管理に関わる高度な知識や技術が求められる。この領域では健康づくりのための「食と運動との関連性」、「運動とエネルギー代謝」や「栄養管理の重要性」、「身体と栄養」等について学ぶ。</p>
健康運動機能特論Ⅱ	<p>健康とは、身体的能力だけでなく、社会的・個人的な面での資源という点を重視した前向きな考え方である。高齢社会において健康寿命の延伸がいわれ、日々の生活環境にうまく対処する手段として、健康づくり(ヘルスプロモーション)が強調されているところである。ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をさらにうまくコントロールし、改善していけるようになるプロセスであり、ただ保健医療部門にゆだねられる責務というよりは、健康的なライフスタイルをさらに越えて、幸福(well-being)にまで及ぶものである。人が身体的、精神的、社会的に健全な状態に到達するには、個々人や集団が、望みを明確にし、それを実現し、ニーズを満たし、環境を変え、それにうまく対処していくことができなければならない。介護予防事業等における効果的で、継続性のある運動、口腔、栄養等に関するプログラムの検討やその成果の検証を行なう。</p>

授業科目名	講義等の内容
自律神経障害支援特論 I	<p>リハビリテーションの対象には脊髄損傷や筋委縮性側索硬化症などの神経・筋疾患、心機能・呼吸機能の障害を有する内部疾患など、運動障害だけでなく自律神経障害を有する疾患も多い。自律神経は血圧や呼吸の調整を行うことから運動負荷時の呼吸・循環反応は運動療法の治療方法やその効果の判断指標として用いることが可能である。長期臥床者や頸髄損傷者の起立性低血圧、心疾患患者の不整脈、呼吸器疾患患者の呼吸リズムのコントロールなど、自律神経障害を理学療法で改善できるか？などの課題も抱えている。これらの疾患では肥満や痩がみられ、栄養状態の良否が運動機能に影響を与えている可能性がいわれており、呼吸器疾患では栄養状態の維持が課題となっている。本講座は心電図から自律神経活動を分析し、理学療法の効果判定や自律神経障害そのものの改善の可否を検討するものである。</p>
自律神経障害支援特論 II	<p>自律神経は疾患によっては自律神経系そのものが障害されるが、直接に障害を受けなくても運動器や呼吸・循環器、消化器など、ヒトの持つ機能の全てに影響を与えると同時にそれら各機能の変化を受けて活動も変化する。本講座では姿勢の変化や運動負荷の相違、栄養摂取の違い、外部刺激の条件変化などによって自律神経活動がどのように変化するか？を主目的として演習を中心に開講する。手法として心電図から心拍揺らぎを測定し、R-R 間隔の周波数解析から交感・副交感神経系の活動を分析する。演習では心電図の計測方法の理解と実践、周波数解析とデータの解釈と統合など、健康づくりの効果指標・方法の検討を行う。</p>
地域活動支援特論 I	<p>リハビリテーションは、障害のある方や高齢者(対象者)が、期待される最良の心身の状況を獲得し、年齢や障害の程度に応じ、その地域に住む方々と、社会的・教育的・職業的・経済的・文化的に同程度の水準の生活がなされるように支援することである。そのための地域リハビリテーション活動支援技術として、以下について演習・育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 評価およびニーズ把握と支援技術の分析 対象とする個人・集団の医学面と生活面の両面からの評価およびニーズ把握により、生活支援に必要なリハビリテーション技術の抽出能力を育成する。 2. 生活の場の診断と課題分析 対象とする個人・集団。が。生活する「場」について、生活環境アセスメント、社会資源アセスメント、制度や介護・福祉サービス等の把握および課題の分析方法を育成する。 3. 活動支援と生活の場とを統合する技術 対象者に期待される心身の状況を支援する専門職を含む住民の形成と、生活を継続する統合機能を育成する。
地域活動支援特論 II	<p>わが国は急速な高齢化に伴い、要介護高齢者や認知症高齢者が増加しており、早期診断の推進と適切なリハビリテーション・ケアの研究開発と普及、家族支援を含めた地域社会生活支援体制の構築などの高齢者・認知症対策が急務となっている。</p> <p>本授業科目前半では、認知症の中核症状である認知機能障害や BPSD、生活機能障害、QOL のアセスメントとリハビリテーション、環境整備のあり方について、現状の実践とエビデンスの確立状況を講義する。授業後半では、認知症に主要な精神疾患である統合失調症、うつ病も対象として加え、認知機能、ストレス、アセスメント、リハビリテーション、予防、家族支援、ケア、介護などをキーワードとして、先行研究レビューを主とした演習を行い、今後の研究課題および方向性について明らかにする。</p>

授業科目名	講義等の内容
環境健康生活特論Ⅰ	<p>心身機能の多様な障害は健康生活遂行の阻害要素となり、障害を持つ者の生活に多様な障害を惹起する。また、生活障害の現れ方・感じ方は、年齢・性別、生活歴、物理的・社会的な生活環境の違い等により各人各様であり日常における生活動作の遂行から主体的な社会参加までの幅広い生活行為において定型化されるものではない。このため多様な生活障害の評価とその改善のための企画立案はクライアント個別の価値観に対応した支援が求められる。そのため、個別の障がい者の支援については、主体者を支援するという支援理念に基づいた技術面からの多面的かつ具体的な解決策の提案が必要である。ADLやAPDLに代表される生活行為の方法の適切な選択や新たな開発が求められ、それらに対応する自助具・福祉用具の開発、家屋改造等の環境調整、ニーズに応じた移動手手段の獲得や開発、ノーマライゼーションを保障するまち作り等について幅広く学習する。</p>
環境健康生活特論Ⅱ	<p>障害者や高齢者の生活環境について、在宅生活を支える様々な社会サービスを理解するとともに、住環境整備に対する法的制度(介護保険制度)、高齢者や障害者の身体的・心理的特性の理解、疾病別・障害別の住環境整備のあり方などを学ぶ。さらに、住環境整備の共通基本技術として、手すりの取り付けや段差の解消、福祉用具の活用などを学ぶ。演習課題として、実例を通して住宅改修における見取り図作成や福祉用具の製作を行い、生活支援のあり方を検討していく。講義形式にとらわれず、症例検討を中心に住環境整備のあり方を提示していく。</p> <p>その他の課題として、フィンランドとオーストラリアの福祉施策の実情を紹介し、わが国の福祉施策との対比の中より、今後の高齢社会における我が国の取り組みについて議論を交えていく。</p>

* 「健康科学研究法特論講義」「健康科学研究法特論演習」「特別研究Ⅰ」「特別研究Ⅱ」についてはそれぞれの学生の修士論文指導教員が担当する。

入試に関するお問い合わせ先

九州栄養福祉大学大学院

教務課入試係

〒803-8511 北九州市小倉北区下到津5-1-1

TEL 093-561-2060

FAX 093-562-5161

URL <http://www.knwu.ac.jp/>